

令和2年(2020年)秋における外来魚生息状況調査結果

田口貴史・石崎大介・根本守仁

1. 目的

2020年秋季の外来魚（オオクチバス・ブルーギル：以下、バス・ギル）当歳魚の生息（発生）状況を琵琶湖沿岸域での定点調査により把握する。

2. 方法

2020年9月17日から11月10日にかけて、琵琶湖沿岸域（水深7m以浅）の112定点（北湖75定点、南湖37定点*）で調査を行った。調査は小型ビームトロール網（ビーム長4m）を小型動力船で曳網（底曳網）することで実施した。曳網速度は0.27m/秒を基準とし、北湖では5分間、南湖では3分間曳網した。採捕魚の体長組成から、バスでは北湖、南湖別にそれぞれ標準体長150、120mm未満を、ギルでも同様に標準体長60mm未満を当歳魚とし、その生息密度（曳網面積1haあたりの採捕尾数）を算出して、2007年以降の結果と比較した。

3. 結果

バス当歳魚の生息密度は北湖、南湖ともに増加し、前者では410.2尾/ha（前年比131.3%）、後者では2,219.4尾/ha（前年比218.5%）であった（図1）。ギル当歳魚の生息密度は北湖で692.8尾/ha（前年比65.5%）、南湖で292.8尾/ha（前年比40.4%）と減少した（図2）。特に南湖での減少は著しく、過去最低となった。一方、バス当歳魚の生息密度は全湖的に増加傾向で、特に南湖では過去最高となった。近年の外来魚生息量は減少傾向にあるが¹⁾、これらの当歳魚が成長し、繁殖すると、再び生息量が増加（リバウンド）する恐れがあることから、その生息状況の変化に注意し、的確に駆除する必要がある。

*従来の調査地点数は41定点であったが、うち4定点について近年湖底の糸状藻類の繁茂が顕著であり、調査に支障をきたした他、魚類がほとんど採捕されないことから、本年の調査より除外した。

1) 本報告の「令和2年度（2020年度）当初の琵琶湖における外来魚生息量の推定」を参照。

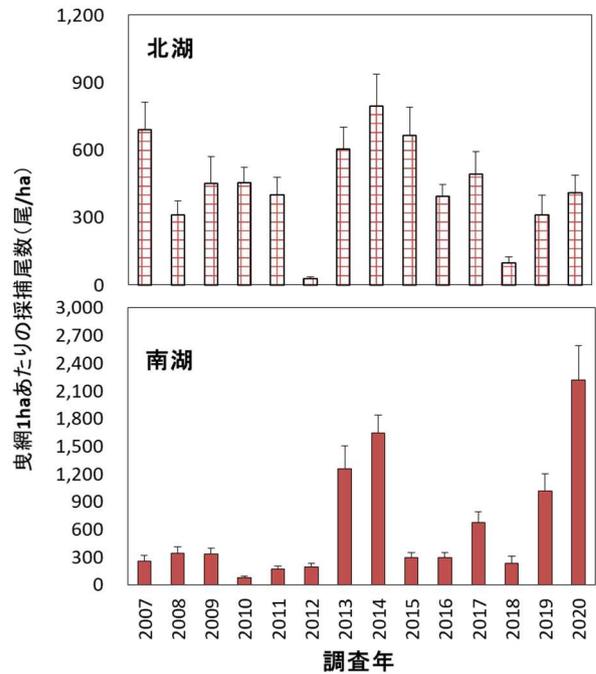


図1 曳網1haあたりのオオクチバス当歳魚採捕尾数の経年変化（エラーバーは標準誤差）

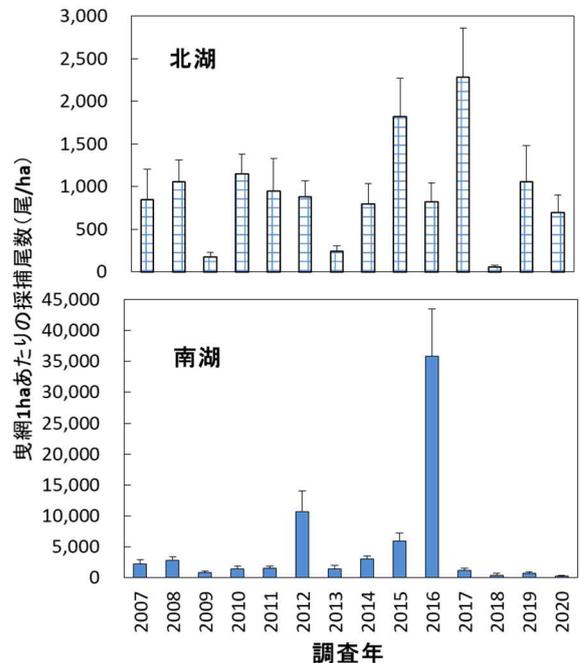


図2 曳網1haあたりのブルーギル当歳魚採捕尾数の経年変化（エラーバーは標準誤差）